

手との黙約 大いなる

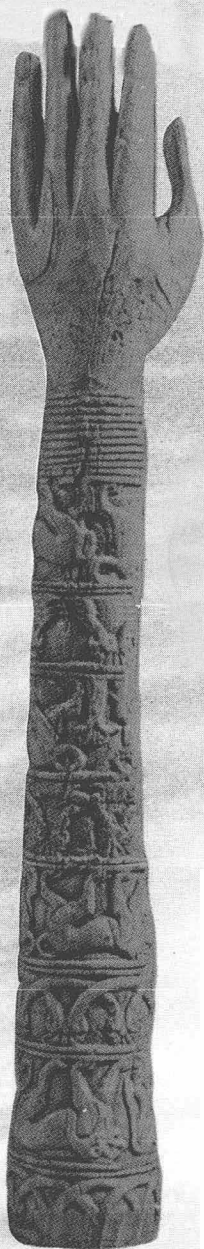
石原慎太郎



手との黙約 大いなる

石原慎太郎

文藝春秋



© Shintarō Ishihara. 1976

大いなる手との黙約

昭和五十一年十月十五日 第二刷

著 者 石原慎太郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

郵便番号 一〇二

東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五一二二一

印刷所 共同印刷
製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

連作長篇小説

大いなる手との黙約

△内容目次▽

悪夢

取調べの途中で検事との会話 (一) 3 1

追いつめられて

取調べの途中で検事との会話 (二) 3 5

喪われた海

取調べの途中で検事との会話 (三) 6 1

少年の魂

取調べの途中で検事との会話 (四) 8 9

二人だけ

取調べの途中で検事との会話 (五) 1 3 7

選手 1 3 9

取調べの途中で検事との会話 (六) 1 7 3

ある航海 1 7 7

取調べの途中で検事との会話 (七) 2 2 5

僧 2 2 9

取調べの途中で検事との会話 (八) 2 6 7

山の声 2 7 1

取調べの途中で検事との会話 (九) 2 9 5

私には約束がある 2 9 9

あとがき 3 2 3

大いなる手との黙約

惡

夢

その男は鉄哉と同じ部屋へ入って来た夜、突然彼の首を締めた。夜半、何かにうなされる男の声で先に眼が醒め、起き上がり相手をゆり起こしてやった鉄哉を、相手は床の中で眼を据えて仰ぐと、次の瞬間何かからぬことを叫んで飛びかかって来て、いきなり彼の首を締めた。

油断していた、というより相手の行為が思いもよらず、そのまま仰向きに押し倒され、鉄哉はまともに首を締められた。小柄だが相手の力は強く、叫ぼうとしたが声が出ず、意識が薄れかけた。薄れていく意識の中でも、男が何やら叫んでいるのを彼は聞いた。

その叫び声と、抗い床を蹴る鉄哉のもの音で、向いの部屋の住人が眼を醒まし看守を呼んだ。二人の看守に飛び込まれ、男はようやくその手を離れた。壁へ突き飛ばされた後やっと起き上がった鉄哉を、男は灯りの下でまじまじと見つめていた。

「何をするんだ」

怒鳴りつける看守には答えず、鉄哉を見つめたまま、

「お前は、青木じゃねえな」

喘ぐようにつぶやいた。

「何をいっていやがる。俺は橋本だよ。手前の顔なんか見たこともねえや」

それでも男は視点の定まらぬ眼を凝らすようにして彼を見つめ、

「青木じゃねえな。なら、立って見てくれ」

「立ってどうするんだ」

「お前はびっこじゃねえな」

「何をいつてやがる。昼間見てわかってんだろう」

どう判じていいかわからぬまま見較べる看守の前で、彼は段々に夢から醒めていくような顔つきになり、突然手を突くと、

「すまねえ、同僚。俺の間違いだった。人違いだった。悪く思わないでくれ」

と詫びた。

「なんだ、寝ぼけたのか。人さがせな奴だ」

「申し訳ありませんでした」

打って変って恐縮する男の様子に、鉄哉よりも先に看守は納得したのか鍵をかけ直して出ていった。

急を報せた向いの住人が何か冗談をいつて寝てしまった後も、鉄哉はそのまま寝つけず黙って膝を組んで男を眺めていた。男はさっき見ていた夢を思い出してか確かめ直すような眼つきの後、改めて寝ぼけた間違いと悟り直してか、

「悪かったな」

男は本気で恐縮したような、人なつっこい笑顔でいった。

「同じ部屋に二人しかいずに人違いもないもんだぜ」

「矢つ張り夢を見てたんだ。悪い夢をな」

ぼそりという。

「誰かの夢かい」

「ああ。その野郎がここまで来やがった。いや、あんたに化けてここにいやがったと思ったんだ」

「誰だね、それあ。仇敵か、あんたの」

「そうだ。奴はいつか、この俺を殺そうとしていやがる」

男はまた、半ば夢を見ているような眼つきになった。

「あんたは、人を殺^やったんだそうだな」

鉄哉は昼間、男が入って来る前に看守から噂を聞いていた。

「荒っぽい奴が入ってくるぞ。殺しの常習のな」

看守はいったが、夕方入って来た男は年下の鉄哉に向かって慇懃で人なつっこく見えた。こんな場所で男はもの慣れて見え、顔や腕にある傷痕を見なくとも、男が堅気の人間でないのは知れた。

前の同居者は鉄哉が入って来るなり彼の容疑について尋ね、取り調べの検事にはそこまで話したかどうか知らぬが自分のやったことを逐一話して聞かせたが、この男は取り調べに疲れたのか、事件の疲れが出たか、部屋に入るなり手短な挨拶の後すぐに眠り出し、夕飯に起き上がり、飯を食うとすぐまた寝込んだ。

その彼が今になって、

「なんだか眠りたくねえな」

はにかんだように唇を歪め、今見た夢におびえる子供のように笑って見せた。

「俺だってそうだよ。寝ていてまたいきなりやられちゃたまらねえからな。何もしてないのに、こんなところへ放り込まれた挙句」

「悪かったな」

男はくり返した。

「何をやったんだ」

「だから何もやっちゃいないよ。仲間がやった傷害致死の巻き添えだ。そいつがつかまりやわかることさ」

男は肩をすくめただけだった。

「あんたは、人を殺^やったんだそうだね」

「ああ」

男は別に悪びれずに頷いた。

「初めてじゃないみたいだな」

「そうだ」

「今度は誰をやったんだ」

「ある野郎だ」

「何故かね」

「よくわからねえな。殺されると思ったから、やっちゃまったんだ。ひと刺しだが、死んじまったそうさ。尤も死んだってどうという野郎じゃねえ。勲章ももらえやしねえがな」

男は笑った。

そんな様子からは、やったことがらが男にとって鉄哉が考えているのとは大分違うもののような気がした。

「寝なよ」

「しかし、あんたが寝た後じゃないと、何だか寝る気がしないよ」

「大丈夫だよ。お前が青木じゃねえことは、もうわかった」

男の口ぶりだと、いかにも青木という男が実際にこの未決監房の中にまでやってきて、彼をどうにかする可能性があるように聞こえる。

男に促され床に入ったが、鉄哉は暫くの間寝つかれなかった。床の中で、さっき首を締めつけてきた男の手の厚く固い触感が蘇って来、彼は改めてこの男が自分でいっている通りの人殺しであることを悟り直した。寝たふりをして眼を薄く開いて覗いてみたが、男はまた同じ夢を見ることを怖れたように、いつまでも壁によりかかったまま眠らずにいた。

翌日、担当検事の前に呼び出され、前回に聞かれたことと同じことを質されたが、前に答えた通り、鉄哉に吐くことは何もなかった。警察が他に探している三人の重要参考人の誰かがつかまればすべてわかるはずだった。だが、事件の時の、鉄哉のアリバイがなかった。その夜、彼は気まぐれに一人で映画をみていたのだが。

検事も半ば鉄哉のことを信じたようで、彼と同じように警察の手が他の参考人を探して捕えるのを待っているように見えた。

尋問が終って引き上げる前、鉄哉は前夜の出来事を話し、検事にあの男について尋ねた。

「ああ、人斬り元治か」

検事は笑っていった。

「あいつくらいのことをしてりや、夢でうなされることぐらいあるだろう」

瀧井元治という名は彼から名乗られて知っていたが、仇名を聞くのは初めてだった。

「そんなに今まで人を斬ったり殺したりしたんですか」

「大部やってるな。尤もみんなやぐざ相手の出入りだが。未成年の頃から始まって、傷害殺人、挙げられただけでも七、八件あるだろう。それ以外にも表沙汰にならない事件がいくつか」

「今度はなんです」

「縄張りのいざこざで相手の幹部を、いきなりやった。相手の話じゃ、ただ声をかけて呼びとめただけだそうだが」

「当人は、やられる前にやったといっていましたよ」

「そうかもしれない。あの連中のことだ。それに、あの男みたいになると、自分についてもという時、ああするより方法がないのかも知れないな」

検事のいうことは鉄哉にはよくわからなかった。

「あいつも、何かでつまずかなきゃ、あんな氣狂いみたいなことにはならなかったんだろうが。もうああなると病氣だな」

「今度の事件も、その病氣ですか」

「人を何人も殺してりや、因縁背負って祟られることもあるだろう」

検事はいった。

「青木という男は生きてるのでしょうか」

「そこまでは知らんよ」

その日と次の日は何もなかったが、翌々日、部屋から引き出された瀧井はふさいだ顔をして戻って来た。

「どうかしたのかね」

黙って壁にもたれ天井を仰ぐ瀧井に質すと、暫くし、

「ああ、弱えよ。女房が来やがった。子供と田舎へ行ってたんだが」

「奥さん、なんていったね」

答えず、代りに、

「もう、段々と馬鹿も出来ねえなあ。世間もうるさくなつて来たし、俺もこれでいい潮だ。これで刑務所^なから出て来りや自然に手前の片もつくだろう」

いったきり、塞ぐように眼を閉じ黙りこくった。

その夜、鉄哉は前と同じように彼のうなされる声で眼を醒ました。前があり、このまま放っておこうかと思つたが、放つておいても寝たまま何をするかわからず、前にこりて用心し、体を離し直接体に触れずに声をかけた。

瀧井よりもむしろ、周りの部屋の住人の誰かを先に声で起こしておこうと思つた。近くの部屋で誰かが眼を醒ます気配があり、それを確かめ、彼は足の先で、肩を蹴るようにして瀧井を起した。

一度の衝撃で彼は眼醒め、起き上がり、跳び上がるようにして部屋の隅へすさった。